

日本人入蔵僧によるチベット写真資料

——青木文教，多田等観，河口慧海を中心に——

高 本 康 子

19 世紀末から 20 世紀初めにかけてのチベットを撮影した写真が，非常に貴重な記録となっているのは言うまでもない。当時，撮影技術を持ったチベット人は非常に少なく¹⁾，また外国人による撮影も，結果として非常に限られた範囲の人々によってのみなされた。欧米では既にその整理と研究が始められており，例えば英国のピット・リバー，大英両博物館は，所蔵のチベット関連写真を 1920 年から 1950 年までのものについて整理し，インターネット上で公開した (The Tibet Album: British Photography in Central Tibet 1920-1950)²⁾。しかし日本においては，この時期何人かの日本人が入蔵し，写真を持ち帰っているにもかかわらず，これらの写真自体に注目した調査・研究はほとんどなされていない。

1. 青木文教関係写真資料

日本人入蔵者の写真として，最も知られているものは青木文教のもので，点数もまとまっており，撮影技術の水準も高い。その写真点数の多さは，青木のチベット滞在記である『西藏遊記』所載写真が 151 点にのぼることにもうかがえる。他の入蔵者の旅行記所載の写真点数は，例えば河口慧海『西藏旅行記』は 7 点，『第二回チベット旅行記』（講談社，1981 年）は 0 点，多田『チベット滞在記』（白水社，1984 年）は 9 点，海外のものでは Waddell の *Lhasa and Its Mysteries* (London, 1905 年) が 86 点，Bell の *Tibet, Past and Present* (London, 1924 年) が 40 点であり，青木旅行記が際立っていることは明らかである。

また，写真所載の青木の著作としては，前掲旅行記『西藏遊記』の他に，60 枚が収められた『亜細亜大観』（亜細亜写真大観社，1927 年），37 枚が収められた「西藏入国記」（『新西域記』所収，有光社，1939 年）がある。特に『亜細亜大観』は，紙焼きの写真をそのまま貼り付けたアルバム形式になっており，状態のよい写真がそのまま残されていることで，非常に貴重なものであるといえる。

日本人撮影のチベット写真としては，青木に先立って 1901（明治 34）年，外務

(14) 日本人入蔵僧によるチベット写真資料 (高 本)

省派遣の調査員としてチベットに入った成田安輝(1864-1915)による40枚があり、うち24枚が1904(明治37)年の『地学雑誌』に発表されている³⁾。しかし成田はラサに入る直前にカメラを紛失しているため、当然のことながら、当時チベットに対する関心の主要な焦点の一つであったラサの写真は持ち帰らなかった。またチベット内地ではなく、インド国境のヒマラヤ地域では何人かの日本人が写真撮影をしており、1927-28(昭和2-3)年にインドからヒマラヤを旅した長谷川伝次郎(1894-1976)が名高い⁴⁾。ヒマラヤ地域写真の最初期のものは、1917(大正6)年、日本画家であり日本山岳会の初期の会員でもあった石崎光瑤(1884-1947)撮影の写真と思われる。しかしその写真が収められた旅行記『印度窟院精華』(便利堂、1919年)は私家版で、ごく限られた人にしか知られていなかった⁵⁾。

以上の写真資料について筆者はすでに、「近代日本仏教における異文化情報の受容と発信—青木文教撮影チベット写真資料を中心に—」(『印度学仏教学研究』第58巻第1号、2009年)、「明治大正期日本におけるチベット画像資料—日本人入蔵僧の旅行記を中心に—」(『論集』第36号、2009年)において検討を行っている。本稿は以上の成果に基づき、新たな写真資料、すなわち、①東北大学所蔵河口慧海コレクション中の写真資料と、②多田等観遺品中の写真資料の調査と分析を試みるものである。

2. 東北大学所蔵河口慧海コレクション、北村甫所管多田等観資料

まず、①東北大学所蔵河口慧海コレクション中の写真資料について述べる。同コレクションの資料総数は1486点にのぼり、その概要についてはすでに目録『河口慧海請来チベット資料図録』(東北大学文学部東洋・日本美術史研究室、1986年)がある。写真資料は総数57点(『河口慧海請来チベット資料図録』272-289頁所載)で、その被写体から推測して、インド、ネパール、チベットで撮影されたものと思われる。

一方、②多田等観遺品中の写真資料は、多田に師事した言語学者北村甫が保管していた多田関係資料中に含まれるものである。ラサ滞在時代から帰国直後にかけてのメモ、日記、手稿、書簡等、またアメリカ滞在時の北村宛書簡など、総数は205点、うち写真資料は147点で、いずれもチベット、インド、満洲で撮影されたものと思われる。撮影者が多田自身と推測される資料も多い。これらの資料は、2010年度、国立民族学博物館に移管されるにあたり、発表者が整理調査の一部を行う機会を得たものである。

両資料群中に含まれるチベット内地を被写体とした写真資料は、日本人入蔵者によるチベット写真資料として最も大規模かつ撮影水準が高いものと推測される青木文教の写真を、以下3点において補填するものであると言える。すなわち、

①青木写真では被写体とされていない事物の記録として、青木のチベット滞在は、インドとの国境地帯カリンボン、ダージリンでの滞在を含めても、4年にすぎない。また、青木が訪問した場所も、ラサとその近郊に限られ、例えばシガツェやギャンツェなどは、入国・帰国の途上に立ち寄ったにすぎない。しかし例えば多田は、10年にわたってラサに滞在しており、チベット内地の旅行も複数回行っている。ラサから70キロ余り離れたガンデン寺院近辺には4回（前掲『チベット滞在記』、123-129頁）、またやはりラサから180キロほどあるヤルルン地方にも、帰国前に一ヶ月かけて旅行している（前同、132-134頁）。従って、青木が撮影し得なかったものが複数、多田写真の被写体となっているのである。

例えば多田遺品中の、写真裏に鉛筆書きで「brag yer-pa」という書き込みがあるものは、チベット滞在中最初の旅行となったガンデン寺院への巡礼の際撮影されたものと推測される。書き込み通りとすれば、この写真の被写体は、「チベット仏教を復興した重要史跡」（前同、125頁）であるタイェルパであると思われる。同地に関して青木には、訪れたという記述も、またこれを被写体とした写真も見あたらない。

②青木写真と同一のものが紙焼き現物として残されていること。青木の写真は、現在では原版、フィルムともに所在不明である⁶⁾。青木の記述から、戦災で失われた可能性が高いと推測される⁷⁾。従って、青木の写真は、アルバム形式の『亜細亜大観』を除けば、『西藏遊記』、『新西域記』所載の、いわば印刷されたものしか残っていないことになる。多田・河口写真中には、青木写真と同一の写真が複数含まれており、写真現物として残されている貴重な資料であると言える。

例えば、河口コレクション中、河5-039と番号を付せられ、裏面に「ラハサノ大祈祷会」という書き込みがある写真（『河口慧海請来チベット資料図録』、273頁）は、『西藏遊記』350頁所載「ツオンジュセルバン祭の行列」と付記されたものと同ーである。同様に、河5-050（『河口慧海請来チベット資料図録』、277頁）は、『西藏遊記』24頁所載「西藏婦人に扮装せる矢島泰次郎氏」^{ママ}、河5-052は前同26頁所載「ダーヂリンの南なるグウム駅に於ける西藏寺院」、河5-053（『河口慧海請来チベット資料図録』、277頁）は『西藏遊記』267頁所載「西藏の高僧（密教派に属せる）」と同一のものであると考えられる。また、河5-037（『河口慧海請来チベット資料図録』、

(16) 日本人入蔵僧によるチベット写真資料 (高 本)

272 頁) は、『西藏遊記』104 頁所載「札什喇嘛法王 (ツアロン氏寄贈)」と同一のものであり、多田遺品中にも同じものが存在する。

①青木の著作には未収となった写真が含まれる可能性があること。青木の手元には、『西藏遊記』をはじめとした著作には収められなかった写真が多数あったと推測される。彼はラサ滞在当時を振り返って、「予のキヤメラが驚くべき活動をなし、無料撮影の写真師として忙殺された」(『西藏遊記』, 371 頁) と書いている。この「無料撮影」は、主に人物写真の撮影を指すと思われるが、しかしこれは、青木に他の日本人たちとは比較にならない豊富な撮影の機会が与えられていたことを暗示する言葉の一つであると思われる。従って、現地での撮影点数も多かったと考えられ、著作に収められた以外の写真も多数存在したと推測しうるのである。例えば『西藏遊記』279 頁掲載の写真は、写真を貼り付けたアルバムをのぞき込んでいるチベット人少女二人を被写体としたものである。このアルバムは現存が確認されていないが、ラサ滞在時、彼の手元に、撮影者が彼であるものもないものも、ある程度まとまった写真の蓄積があったことを示唆する一つの例と考えられる。

このような青木の、著作未収の写真は現在、ほとんど残されていない。しかし、多田・河口資料には、これらの、すでに失われた写真が含まれている可能性がある。なぜなら、彼等の間で、写真をやりとりした形跡が見られるからである。

例えば、東北大学所蔵の河口写真の一枚には、「大正三年八月廿六日西藏ラッサ府ニテ青木文教氏の撮影せし者を十二枚同氏より賜与せらる」という書き込みがある(東北大学文学部東洋・日本美術史研究室監修『河口慧海請来チベット資料図録』佼成出版社, 1986 年, 277 頁, 資料番号河 5-053, 写真 21)。この 12 枚に相当するのがどの写真資料であるのかは不明であるが、青木が河口に 12 枚写真を贈ったことは確実であると考えられる。

例えば河口コレクション中、裏面に「ノル^{ママ}プリンカノ法舞場ニ於テ大象ノ礼拝」と付記されている河 5-044 (『河口慧海請来チベット資料図録』, 275 頁) は、『西藏遊記』354, 355 頁所載「西藏のハモ劇 (其二) 舞踏」, 「同上 (其四)」と、被写体となっている状況に、テントの文様と柱の角度、背景の木立の形状など、共通点が複数見て取れる。同様に、河 5-047 (『河口慧海請来チベット資料図録』, 276 頁) は、『西藏遊記』346 頁所載、『亞細亞大観』第 2 回 -5, 8 「モンラム祭に於ける古武士 (騎兵) の行列」と、建物の形状からほぼ同一の角度で撮影されたと思われる。更にこの 3 点に関しては、被写体となっている建物の窓飾りの形状や、バルコニーの

日よけの状態、屋根の上に放置されている落下物の状況などから、同日に撮影されたものではないかとも推測される。また、多田遺品中、チベット人の男児を被写体としたものは、『西藏遊記』366頁所載「拉薩留学中の筆者」と付記された、チベット服を着用した青木の肖像写真と、共通点が多い。どちらも室内での撮影で、飾られている額や、背後に並べられている書籍も共通している。そのため、同じ部屋で撮られたものではないかと思われる。このような写真が、多田遺品中に、それも多田撮影と推測される写真資料中に含まれていたということは、『西藏遊記』の青木文教肖像も、多田が撮影したものである可能性を示唆するものである。

今後は、河口、多田を含め、日本人入蔵者の写真の所在とその内容について、調査と分析を進めていく予定である。例えば多田については、没後海外に寄贈されたもの⁸⁾などもあり、更なる追跡調査が必要である。

- 1) たとえば、1913年から三年間ラサに滞在した青木文教の『西藏遊記』には、チベット人から提供されたとおぼしき写真が数枚収められている。うち、「ツァロン氏寄贈」と付記された3点は、ダライラマ13世に抜擢され、軍司令長官、大臣を務めたツァロン・ダサン・ダドゥル（1885-1959）によるものと思われる。彼の妻の一人リンチェン・ドルマ・タリンによれば、彼は写真を趣味の一つとしており、自宅には暗室も設けられていたという（R・D・タリン『チベットの娘』三浦順子訳、中公文庫、1991年、158頁）。前掲『西藏遊記』、および青木の帰国時の手記である「出蔵記」には、ツァロンとの応接に触れる記述があり（『西藏遊記』126-128, 377-378頁、「出蔵記」1月26日付部分）、青木との交流が推察される。また、「ツェリン氏寄贈」と付記されたものが1点あるが、現在のところ、『西藏遊記』その他青木の記述に、この人物に関する情報は見えず、特定には至っていない。あるいは「出蔵記」2月7日部分に言及される「旧友 Dorji Tsering」かとも推測される。「出蔵記」は国立民族学博物館青木文教師アーカイブ中の資料であり（番号60、長野泰彦、高本康子編『青木文教師アーカイブ『チベット資料』目録』国立民族学博物館、2008年）、翻刻は、青木文教「チベット日誌」（長野泰彦・高本康子校訂、『国立民族学博物館研究報告』34巻4号、2010年、765-802頁）中に収められている（776-793頁）。
- 2) その他、例えば米国ウィスコンシン大学ミルウォーキー校が、米国地理学会所蔵のチベット写真（1900-1901年、1932年、1937年撮影）を整理し公開している。
- 3) 「成田安輝氏拉薩旅行写真集」『地学雑誌』183-186, 191, 192号、いずれも1904年。なお掲載初回（『地学雑誌』第183号）には、小川琢治による解説「成田安輝氏拉薩府旅行」がある（193-194頁）。
- 4) 長谷川伝次郎は1925年インドに渡り、ベンガル州のサンティニケタン大学に留学、古美術を研究した。このヒマラヤ旅行で撮影された写真は旅行記『ヒマラヤの旅』（中

(18) 日本人入蔵僧によるチベット写真資料 (高 本)

央公論社, 1932 年) に収められており, 日本で最初のヒマラヤブームを起こしたと言われる (深田久弥『ヒマラヤ登攀史』岩波書店, 1969 年, 204 頁). 上掲『ヒマラヤの旅』には計 382 枚の写真が収められており, チベット内地への旅である「カイラスへ」部分には, 71 枚が掲載されている.

- 5) 『印度窟院精華』には, ヒマラヤ旅行分の 14 枚 (16-25 頁所載) を含め, 計 192 枚の写真が収められている. 石崎はこの旅行の際, 出蔵直後でダージリンに滞在中の青木文教の助言を得, 青木宅にも宿泊した (『印度窟院精華』付記行, 18, 24 頁). 石崎が残した写真資料については, 本文後掲高本「明治大正期日本におけるチベット画像資料—日本人入蔵僧の旅行記を中心に—」124-5 頁) に詳述した.
- 6) 青木の生家滋賀県高島市の正福寺には, カメラをはじめ, 計 11 点の関連機材が遺品として残されている. カメラには Dallmeyer Pentac Speed Camera とあり, これが 1923 年に発表されたダルメイヤー・スピード・カメラのペンタック F2.9 レンズ付であれば, チベットで使用されたものではない可能性が高い. なお, 写真ネガも, これら正福寺資料中には含まれていない.
- 7) 国立民族学博物館青木文教師アーカイブには, 青木が第二次世界大戦期にまとめたと思われる『西藏全誌』と標題を付せられた原稿群があり, その中に No.140 まで, 写真のタイトルが挙げられた「写真内容」(アーカイブ番号 322) と題するリストがある. 同資料には, No. 95 以降の写真は戦災により欠失したという青木の書き込みがあり, 従って青木の手元にあった写真が, 少なくとも 140 点中 45 点は失われてしまっていたことがわかる. これら戦災で欠失した写真資料については, 国立民族学博物館青木文教師アーカイブ中に, 「戦災欠失分補欠写真目録」(アーカイブ番号 261) がある. 但しこの資料にも写真の現物は添付されていない. 各タイトルを見る限り, その内容には, 特に東チベットに関連するものなど, それ以前の青木の著作『西藏遊記』, 『亜細亜大観』, 『新西域記』所載の写真以外のものが多く含まれると推測される. 『西藏全誌』関連写真については, 高本康子「解説 青木文教の他の著作との関連, 『西藏全誌』写真資料について」(青木文教『西藏全誌』芙蓉書房出版, 2010 年, 414-415 頁) に詳述した.
- 8) 例えば, チベット文化の保護を目的として運営されている米国の民間団体 Tibet House US の Old Tibet Photo Archive 中に, 東洋文庫を経て寄贈されたものがある.

〈キーワード〉 河口慧海, 多田等観, 青木文教, 北村甫, 国立民族学博物館, 写真 (群馬大学国際教育・研究センター「アジア人財資金構想」担当講師, 博士 (国際文化))